

文化

CULTURE

「讃岐野山に電がたてば 続く遍路の菅笠」
弘法大師ゆかりの靈場を巡る「お遍路さん」の姿は、私たち四国に住む者にとっては、その季になれば目にする心和む風景である。
しかし、お遍路さんがたどる「遍路」は、近年、道路状況などの変化を受けて、その所在が分かりにくくなってしまっている。特に住宅地ではほとんど忘れてしまっている。
八十八カ所の札所を結ぶ遍路道は、「修行の道場」とされ、札所と一体となって、遍路の重要な部分を担ってきた。

札所を巡拝することを「打つ」と言つてゐるが、その打ち方は、順番通り巡る順打ち」でも、逆順の「逆打ち」でも、逆順の「逆

香川県下だけでも、遍路道の道筋を示す道標が、現在五百一基、次の札所までの距離を示す丁石が二百九十七基確認されるのも、巡拝の道筋をそぞり異なる。このため、「手形」の表情も、それ異なつており、どれ一つをとっても同じものではなく、表情豊かに、お遍路さんを次の札所に案内している。

近年、急激に増えてきた「歩き遍路」の心を、道標や丁石が、どれほど癒やしていることか。それらの一つ一つの価値は小さくとも、修行の遺産と言える。

道標・丁石の中には長い年月、厳しい自然や人為的な影響を受け風化が進んだり、損傷を受けたりしているものも少なくない。また、この二十余年ほどの間に、遺失したり、道路

300年余の歴史に迫る

勤務の時から二十余年にわたって、宮々として取り組み続けたラ

イフワークである。

県下の遍路道の概要についての川

田氏の報告は、すでに一九七九年に

「遍路道踏査・道標・丁石を中心

して」(香川県自然科学館研究報告

Ⅰ)、一九八〇年に「香川県下の遍

路道踏査(II)」(香川県自然科学

館研究報告2)に発表されているが、二十数年が経過したことから最近の

【表2】道標の形態

角柱型
(347基)地蔵型
(79基)自然石型
(69基)板碑型
(3基)常夜灯型
(3基)

て今日に至つてはいる。形はおよそ二種類に分類できるが、大きさや案内のための「手形」の表情も、それ異なつており、どれ一つをとっても同じものではなく、表情豊かに、お遍路さんを次の札所に案内している。

近年、急激に増えてきた「歩き遍路」の心を、道標や丁石が、どれほど癒やしていることか。それらの一つ一つの価値は小さくとも、修行の遺産と言える。

道場としての遍路道を支えてきたことを考へると、かけがえのない文化

正確な記録を残し、次の時代に引き継ぐと、二〇〇〇年二月「四国遍路道学術調査研究会」が設立された。

以来、川田氏を中心に四十七人の会員が、道標・丁石など遍路道の再調査を行い、「研究報告第一巻」特集

香川県下の遍路道の実態」として、二〇〇二年六月に発表されている。

今回、この報告書をベースとし、再調査に参加した会員によつて、遍

路道の歴史や道標・丁石のいろいろななどを分かりやすく、紙面上に報告

することとなつた。

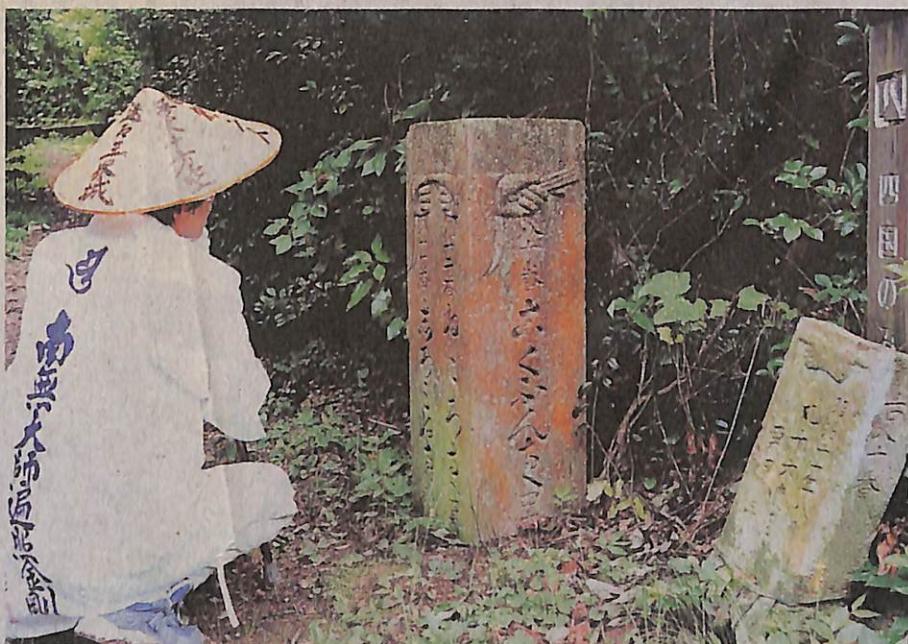
来年、讃岐野山に電がたつ頃まで、二十五回程度の予定である。

読者が、道端に立ち続いている道標や丁石の語りかけに、今一度耳を傾け、そして、この讃岐の地に芽生え、受け継がれてきた「お遍路の文化」に目を向けて頂けたらと願つて



①

お遍路文化 路傍で支える道標501基、丁石297基



根香道に建つ古田の道標=坂出市青海町

■ 分布

調査結果を各遍路道ごとに分類したのが表1で、石造物の分布を概観できる。丁石は雲辺寺山、五

色台、大窪寺などの山岳寺院の周辺と山麓あるいは次の札所を結ぶ道沿いに集中して分布し、危険で苦しい山道を上り下りする遍路にとつての命綱であったことが分か

辺と山麓あるいは次の札所を結ぶ

道沿いに集中して分布し、危険で苦しい山道を上り下りする遍路にとつての命綱であったことが分か

る。一方、道標はその性格上、分岐点や交差点に建つことが多い、遍路道が一般道と交錯する市街地との周辺にも多く分布していることがわかる。

■ 变化

今回の結果を川田裕史氏が一九七九及び八〇年に行った調査の結果と比較してみよう。

全体で、遺失のため確認できな

い道標が二十四基、遍路道の消滅

や通行不能によって確認できな

丁石が十五基を数えた。二つの調

査の間、二十数年に私たちの生活

も道路事情も大きく変化してお

り、それぞれの石造物に存亡をか

けたドラマがあつたことが推測で

きる。

■ 建立年代

今年の結果を川田裕史氏が一九七九及び八〇年に行った調査の結果と比較してみよう。

全体で、遺失のため確認できな

い道標が二十四基、遍路道の消滅

や通行不能によって確認できな

丁石が十五基を数えた。二つの調

査の間、二十数年に私たちの生活

も道路事情も大きく変化してお

り、それぞれの石造物に存亡をか

けたドラマがあつたことが推測で

きる。

■ 形態

丁石は舟形の石に地蔵菩薩像を刻み、これに丁数を刻む形が一般的である。これに対し、道標は形態が多種多様である。地域性、年代差、造営者の意志、予算など多くの要因が考えられようが、お手上げ

よらず、民衆の手によって長い年

月をかけ作り継がれることに関係

する。

丁石は舟形の石に地蔵菩薩像を刻

み、これに丁数を刻む形が一般的

である。これに対し、道標は形態

が多種多様である。地域性、年代

差、造営者の意志、予算など多く

の要因が考えられようが、お手上げ

よらず、民衆の手によって長い年

月をかけ作り継がれることに関係

する。

丁石は舟形の石に地蔵菩薩像を刻

み、これに丁数を刻む形が一般的

である。これに対し、道標は形態

が多種多様である。地域性、年代

差、造営者の意志、予算など多く

の要因が考えられようが、お手上げ

よらず、民衆の手によって長い年

月をかけ作り継がれることに関係

する。

丁石は舟形の石に地蔵菩薩像を刻

み、これに丁数を刻む形が一般的

である。これに対し、道標は形態

が多種多様である。地域性、年代

差、造営者の意志、予算など多く

の要因が考えられようが、お手上げ

よらず、民衆の手によって長い年

月をかけ作り継がれることに関係

する。

丁石は舟形の石に地蔵菩薩像を刻

み、これに丁数を刻む形が一般的

である。これに対し、道標は形態

が多種多様である。地域性、年代

差、造営者の意志、予算など多く

の要因が考えられようが、お手上げ

よらず、民衆の手によって長い年

月をかけ作り継がれることに関係

する。

丁石は舟形の石に地蔵菩薩像を刻

み、これに丁数を刻む形が一般的

である。これに対し、道標は形態

が多種多様である。地域性、年代

差、造営者の意志、予算など多く

の要因が考えられようが、お手上げ

よらず、民衆の手によって長い年

月をかけ作り継がれることに関係

する。

丁石は舟形の石に地蔵菩薩像を刻

み、これに丁数を刻む形が一般的

である。これに対し、道標は形態

が多種多様である。地域性、年代

差、造営者の意志、予算など多く

の要因が考えられようが、お手上げ

よらず、民衆の手によって長い年

月をかけ作り継がれることに関係

する。

丁石は舟形の石に地蔵菩薩像を刻

み、これに丁数を刻む形が一般的

である。これに対し、道標は形態

が多種多様である。地域性、年代

差、造営者の意志、予算など多く

の要因が考えられようが、お手上げ

よらず、民衆の手によって長い年

月をかけ作り継がれることに関係

する。

丁石は舟形の石に地蔵菩薩像を刻

み、これに丁数を刻む形が一般的

である。これに対し、道標は形態

が多種多様である。地域性、年代

差、造営者の意志、予算など多く

の要因が考えられようが、お手上げ

よらず、民衆の手によって長い年

月をかけ作り継がれることに関係

する。

丁石は舟形の石に地蔵菩薩像を刻

み、これに丁数を刻む形が一般的

である。これに対し、道標は形態

辻る

たどり道のり

遍路道学術調査から

②

国遍路道指南は、内容が簡潔でわかりやすいため、お遍路さんに重宝がられ、明治以降まで何回も版を重ねたベストセラーであった。真念はその中で八十八カ所とそのルートを示し「四国遍路」の原型を示した。「八十八」という言葉は、

じる参道の奥に「左遍ん路みち願主 真念」と刻まれた小さな石柱がある。真念が建てた道標だ。真念は、本格的な四国遍路の案内記である「四国遍路道指南」（一六八七年）を著した人物だ。

真念の道標



金長七十九前後の頭の部分がやや丸みのある角錐になっている角柱をしている。兵庫県神戸市六甲山系で産する御影石と呼ばれる花崗岩を使用

して、真念のもう一つの業績は、遍路が迷いやすい分かれ道ごとに、四国全体で二百余カ所に道標を建てたことである。真念の道標は、現在三十三基確認されており、香川県内には十一基現存している。いずれも

している。瀬戸内海を船で運び四国内にそれを建てたと考えると彼の苦労が偲ばれる。

「四国遍路道指南」には道標の位置が書き示されており、本が出版される以前おそらく一六八〇年代にこれら道標が建てられたと考えられる。だとすれば筆者の知る限り遍路以外にある道標も含めて県内最古の道標であり、石造美術史からも

県内に11基が現存

従

（四国遍路道学術調査研究会 柏



玉垣に隠れて建つ真念の道標—観音寺市八幡町

貴重な資料と言える。後から建てられた道標と比べると小型で目立たないが、三百年以上もの間、遍路の道案内を続けていたのである。

真念の道標には、大阪や江戸の町人や地元の庄屋クラスの人々が施主として刻まれている。そこから戦国の世の中から平和となり、生活にも余裕ができた庶民の文化として花咲く元禄時代直前の雰囲気を読み取ることができる。

文化 CULTURE

山る

たど
遍路道学術調査から

③

大窪寺まで七十丁の丁石は、さぬき市前山の花折道の中峠から、順打ちして多和地区的相草・額・助光・東谷・三本松峠・楨川・兼割地区を通る七百余の山道に、一丁(約百九丈)ごとに、七十から数を減じながら大窪寺の門前に到るもので、材

き市前山の花折道の中峠から、順打ちして多和地区的相草・額・助光・東谷・三本松峠・楨川・兼割地区を通る七百余の山道に、一丁(約百九丈)ごとに、七十から数を減じながら大窪寺の門前に到るもので、材



山里の道案内

一丁ごとに結願へ

に結願等に近づく気持ちは、「実にありがたく、おかげをいただいた」

と語ってくれるお遍路さんが多い。

大窪寺から兼割・楨川・三本松峠

・東谷あたりまでの三十八体中三十

五体は宝暦十二年から十四年(一七六二～六四)に建てられている。以後七十丁までは、続く明和元年から後もので天明年間のものもある。

建立者の出身地のわかる五十八基中、「当村」「当処」と地元(寒川郡奥山村)の人の建立になるものが三十七基ある。また、土佐の井筒屋

である。

(四国遍路道学術調査研究会 藤井洋一)

長屋寺を出て、前山の中津を過ぎると、民家もない不安な山間の坂道となる。その勝手のわからぬ辺鄙な村の遍路道を案内されて、一丁ごと

手で宝珠をもつた地蔵坐像であり、最初と最後が特例となっている。

齒岩で高さが百三十センチ他の倍にある高さの立像で、右手に錫杖、左手に宝珠をもつ延命地蔵である。

また、中峠の七十丁は、瓦とセメントの小屋のなかに置かれ、「大窪寺江七十丁」と刻んだ台座の上に、両



国道377号三本松峠に建つ三十丁の丁石=さぬき市多和

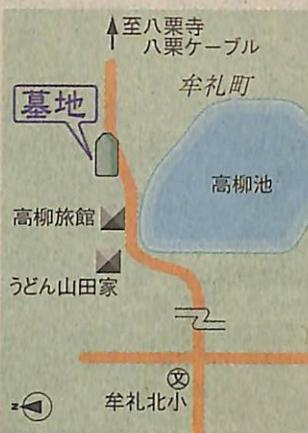
利平治(泉州の石工源藏など)など、丁石建立の功労者らしき人も読み取れ、さらに「なぜ」と探求心をそそられるものも多い。

現さぬき市多和の額と助光にある二つの道路改修碑でわかるように、たびたびの里道拡幅・改修工事が行われており、創建時のままの場所は皆無と思われるが、直近の場所に移されているので、道標としての役目を果たしながら今日に至っているのである。

(四国遍路道学術調査研究会 藤井洋一)

文化

CULTURE



牟礼は石の里である。そこかしこにさまざまな石造物や石のモニュメントが建つ。歩みを止め、ひときわ古そうな一体のお地蔵様に注目して、刻まれた文字を読んでみる。

屋島の急な坂を下り、源平の古戦場を過ぎると、八栗寺へはまた上り坂である。高柳池の堤に沿って坂は険しく、遍路宿を過ぎたあたりで坂は険しさを増す。八栗寺山門まであと少し。



遍路道学術調査から

④

最古の道標



地蔵菩薩の道標（上）と光背に刻まれた文字（右下の写真）＝牟礼町牟礼

お地蔵様に導かれ

舟形の光背には、「享保一四酉正月廿四日 右遍ん路道」と刻まれている。この石造物はここが遍路道であることを知らせる道標、今日で言えば、道路標識にあたるものだ。そして刻まれた年月日は建立の日を表すと見られる。享保十四年は西暦一七二六年を指し、同じ年号を刻む一群が、今回の調査で、年代を確認できただけでなく、現在の道路標識が無駄を省いた機

能重視であるのに比べ、道標には道案内以外にさまざまなものや文字が刻まれている。調査した五百一基の道標について、本来の目的である道案内や建立に関係した人以外の表記を整理したのが図表である。地蔵菩薩が多く彫られたことが分かる。

質素な法衣に坊主頭、私たちが日常的にするお地蔵さまは飾らぬ僧形の姿で、神々しさや威圧感はないが、庶民的で慈愛に満ちた表情をしてい

る。「地獄に仏」とはまさに地蔵菩薩を指す言葉である。六道を巡り、地獄にすら現れて、弱く、罪深い民衆を救つて歩く、痛みや悲しみの身代わりになるときれる仏様である。

遍路の旅は自力の旅、そして祈りの旅である。その動機は多くの場合、人生の挫折や心の傷、当時は不治とされた病などであろう。道々に立つ石造物は機能的であるよりも、疲れた心や体を癒やし、一筋の光明を投げかけるものでなくてはならない。

（四国遍路道学術調査研究会・蓮

道標に 刻まれた祈り	基数	比率(%)
地蔵像	107	21.4
法衣	58	11.6
梵字	53	10.6
大師像	48	9.6
先祖菩提等	17	3.4
添句	12	2.4
大師法号等	13	2.6
六親菩提等	12	2.4
六三界萬靈	7	1.4
三界名	5	1.0
南無阿弥陀仏	5	1.0
天下泰平(太平)	5	1.0
天華罪生善	3	0.6
蓮滅十方子	2	0.4
平等法界	4	0.8
平等	2	0.4
法界	1	0.2
無縁	1	0.2

五色台山上にあり、木漏れ日の中を歩く八十一番札所白峯寺から八十番札所根香寺への遍路道は、江戸時代の風情を現代に伝える香川県では数少ない古道である。道中白峯寺から根香寺までの距離を示す丁石が

当時のまま残されている。白峯寺の

門前が五十丁（一丁は約百九尺）で

順打ちの道順を表している道標である。一方、十九丁に建つてある道標

は、明治から大正時代にかけて四国

遍路を二百八十回近く巡礼したこと

で有名な中務茂兵衛の道標で、「百

三拾七度目の供養の為、明治二十七

年九月」と刻まれている。

正面上部には「十九丁 打もどり」

とある。これは白峯寺から根香寺ま

で打った後（札所を参拝することを

打つと言う）十九丁まで引き返して

国分寺へと向かう逆打ちの道順を示

している。どうして打ち戻りという

巡礼方法が採られるようになったの

だろうか。

それは、国分寺と五色台山上の途

中に「遍路ころがし」と呼ばれる急峻な坂があるが、この坂を避け

るため先に五色台山上にある白峯

寺、根香寺を回り、その後国分寺へ

の逆打ちの道順が出来たと言われて

いる。十九丁にある地蔵の台座に一

七九七年（寛政九年）の銘があるこ

とから、この頃から打ち戻りが行わ

れるようになつたと考えられる。

ところで平成の歩き遍路はどのよ

うな道順を歩いているのだろうか。

国分台に旧陸軍（現自衛隊）の広大

な実弾演習場が遍路道を遮るよう

に出来てからは国分寺から白峯寺へ

の遍路道は通れなくなつてしまつ

た。そのため、国分寺から十九丁へ

向かう途中の新「遍路ころがし」を

登り、舗装された県道を西へ吉田ま

で歩き古田から遍路道へ入つて白峯

寺へと歩く順打ちを歩いている。十

九丁打ち戻りは採らずに第三の道筋

を歩いているのである。四国の遍路

道の中で時代と共に道順が何回も大

きく変遷した個所は五色台以外には

見当らない。

（四国遍路道学術調査研究会 森 昭宏）

辻たどり

遍路道学術調査から

⑤

十九丁打ち戻り

珍しい二つの道筋

している。どうして打ち戻りという

巡礼方法が採られるようになったの

だろうか。

それは、国分寺と五色台山上の途

昭宏

（四国遍路道学術調査研究会 森 昭宏）

根香寺まで歩くにつれてその数がだんだんと減つてゆくように置かれている。その内、古田と呼ばれている四十、と大きな地蔵がある十九丁の二カ所に八十番札所国分寺への道を示す道標が立っている。

古田の道標は国分寺から白峯寺への札所を順番通りに回る、いわゆる



四国遍路では珍しい「打ち戻り」を示す十九丁の道標＝坂出市青海町

CULTURE

文化

辻 たどり 道 の 調 査 から

⑥

私が、現在高松市伏石町に住んでいます。二年前までは田植え時期になるとカエルの合唱が聞こえるのどかな郊外だった。近くにサンフラワーロードができ、新しい店やマンションが建ち、今はアスファルトの道で区画された市街地になつていて

固定化された屋島道

城下立ち入り禁ず

に道標を整備し、遍路道がつくられたのだと思われる。

伏石神社(高松市伏石町)から琴電長尾線仮屋踏切(同市木太町)まで

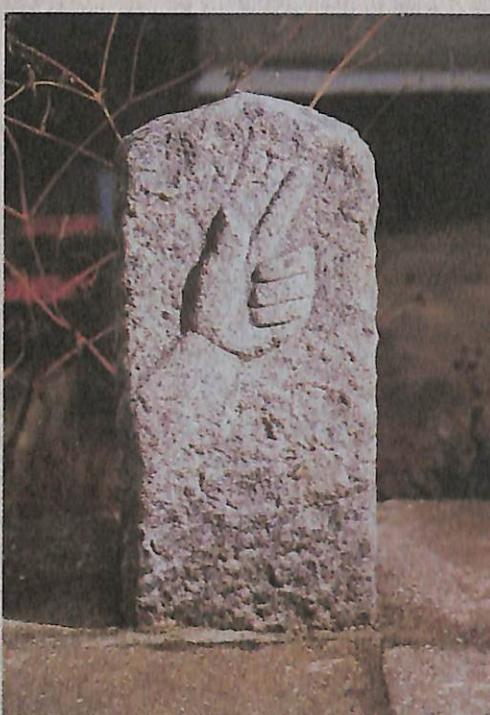
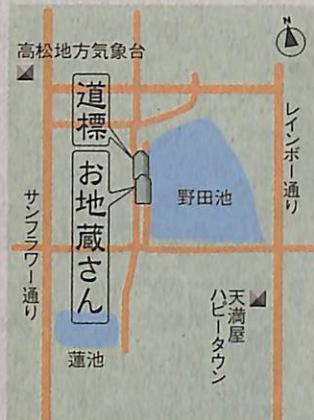
回畠道を曲がなければ行くことができない。それも村の中心を避け、村に歩く道であり、手形の道標で案内されている。道標がなければ歩けないルートである。おそらく、手形道標が見られはじめる十九世紀初め頃

で、十七世紀の真念のルートと、手形道標で固定された遍路道と比べてみた。真念が書いたルートに従うと従来の道を一回だけ曲がって行くことができる。対して遍路道は七回畠道を曲がらなければ行くことができない。それも村の中心を避け、村境を歩くようになっている。どうしてこんな道が選ばれたのだろうか。

十八世紀の遍路の日記を読むと、

「(四国遍路道学術調査研究会 徹哉)」

る。そこに周辺住民の散歩コースとなっている野田池がある。野田池の西堤防を歩くとお地蔵さんがあり、その脇に人さし指で方向を示しただけのシンプルな道標がある。指差している方を見ると屋島が見え、そこが第八十三番札所一寧寺



指差しだけの道標=高松市松縄町

一宮寺から高松城下へ入り、石清尾

八幡神社や城下の寺院へ参拝してい

る。城下での今で言う観光もあつた

のである。ところが、十九世紀前

半になると、高松藩では遍路の城下

へ入ることを禁止し、遍路道を外れ

て歩く遍路を取り締まる法令が出さ

れている。おそらくこのことが屋島

道を今のようなルートにした要因で

であろう。この時代、遍路と言つても

自由に歩けなかつたのである。

文化 CULTURE

八十三番一宮寺から八十四番屋島寺までは平地を歩く遍路道である。五色台の厳しい山道を歩いた遍路にとっては、わずかだが、心穏やかに歩けることと思われる。しかも、目的地の屋島はその特徴のある姿が遠



⑦

近江屋庄七の道標

ための作りつけの皿をもつ角柱の道標で、三面の頭頂部には梵字を刻む、「屋」の屋号から見ても、京都の大店なかなか凝ったものである。建立は「寛政十戊午六月朔日」(一七九八年)とあり、およそ二百年あまり前のものである。

施主は「京都近江屋庄七」であり、「旅中往還當所死」(遍路)とあることから、庄七は四国遍路の旅の途中、この地で亡くなつたものであろう。往還とあるように、このあたりは當時からかなりの大通りであったと推察される。



分かれ股地蔵の隣にたたずむ京都近江
屋庄七の道標=高松市木太町戎

苦難の遍路物語る

道標の立派さから見ても、「近江」といわれる往来手形にある「万」相果候時ハ其所之御作法通り御届ケ不及候とのしきたりにしたがつて、土地の

もの手で、この地に葬られたものと推察される。おそらく、墓標を兼ねたものと考えられるが、江戸時代の遍路旅の厳しさとみに風化が進行するが、近年になつて難となつていて、交通事故に遭つたとみに風化が進行し碑文の判読が困難なものである。

田朋樹
（四国遍路道學調査研究会 姫
損傷も認められ、残念である。



高松高専の西、香東川にかかる沈下橋がある。その五十尺ほど南の西側土手に高さ二尺十二寸、正面幅三十一寸、角柱型の立派な道標があり、他にない特徴をもつている。その一つは角柱の塔身の上に、笠と火袋を

のせていることで、今から百五十二年前の一八五一年に建立されている。民家の少なかつた往時

は遠くからも見えただらうし、日が暮れての火袋の明かりは、一寧寺近くの宿を求めて急ぐお遍路さんにとって、どんなに心強いことだったか。

また、この道標の最大の特徴は、道標建立に関わる四者つまり、願主・施主・世話人・石工の名がそろつて、この道標の建立システムを明確にうかがい知ることができる

県内唯一の貴重な道標である。

正面には、右手親指を中心、人さし指をたて、こぶしを握る形で次々札所への方向を指差し、その下に「宮道」はヨリ二十八丁」と距離を示している。寄進者を「施主」として刻むのだが、この道標には「施主」の文字がない。しかし「紀伊日

吉右衛門の道標

刻まれた四者の名



香東川の土手に建つ吉右衛門の道標
—高松市檀紙町

高郡串本村百姓吉右衛門 女房加津
加よ」とあり、施主は吉右衛門と

「発願 且紙役人中」とあるので、土地不案内の吉右衛門が、地元で事情のよく分かる檀紙村の役人に建立地などについて願主としての助言を得たのである。「世話人 古馬場町 山本屋十兵衛」は高松の石材商であろうか。古馬場の地名は今も高松市に残る。建立は「嘉永四辛亥」(1851年)。石工は「大吉」で、かなり上質の花崗岩製を使用しており、その珍しい手形、筆跡に吉右衛門の道標建立に込める願を受けとめた石工大吉の意気込みが感じられる。

建立関係者の出身地			
出身地	願主(基)	施主(基)	世話人(基)
総基数	127	263	61
香川県内	18	85	32
香川県外	93	122	10
内	1	1	1
外	8	3	4
秋山群	4	1	3
東福愛岐	1	3	1
三滋京大和	5	9	9
兵岡広山愛徳	2	2	2
高福大佐長台	18	14	1
歌	1	1	3
訖田形馬玉京井知阜重賀都阪山庫山島口媛島知周分賀崎鷲	1	1	1
内	1	1	1
外	8	3	4
秋山群	4	1	3
東福愛岐	1	3	1
三滋京大和	5	9	9
兵岡広山愛徳	2	2	2
高福大佐長台	18	14	1
歌	1	1	3
訖田形馬玉京井知阜重賀都阪山庫山島口媛島知周分賀崎鷲	1	1	1
内	1	1	1
外	8	3	4
秋山群	4	1	3
東福愛岐	1	3	1
三滋京大和	5	9	9
兵岡広山愛徳	2	2	2
高福大佐長台	18	14	1
歌	1	1	3
訖田形馬玉京井知阜重賀都阪山庫山島口媛島知周分賀崎鷲	1	1	1
内	1	1	1
外	8	3	4
秋山群	4	1	3
東福愛岐	1	3	1
三滋京大和	5	9	9
兵岡広山愛徳	2	2	2
高福大佐長台	18	14	1
歌	1	1	3
訖田形馬玉京井知阜重賀都阪山庫山島口媛島知周分賀崎鷲	1	1	1
内	1	1	1
外	8	3	4
秋山群	4	1	3
東福愛岐	1	3	1
三滋京大和	5	9	9
兵岡広山愛徳	2	2	2
高福大佐長台	18	14	1
歌	1	1	3
訖田形馬玉京井知阜重賀都阪山庫山島口媛島知周分賀崎鷲	1	1	1
内	1	1	1
外	8	3	4
秋山群	4	1	3
東福愛岐	1	3	1
三滋京大和	5	9	9
兵岡広山愛徳	2	2	2
高福大佐長台	18	14	1
歌	1	1	3
訖田形馬玉京井知阜重賀都阪山庫山島口媛島知周分賀崎鷲	1	1	1
内	1	1	1
外	8	3	4
秋山群	4	1	3
東福愛岐	1	3	1
三滋京大和	5	9	9
兵岡広山愛徳	2	2	2
高福大佐長台	18	14	1
歌	1	1	3
訖田形馬玉京井知阜重賀都阪山庫山島口媛島知周分賀崎鷲	1	1	1
内	1	1	1
外	8	3	4
秋山群	4	1	3
東福愛岐	1	3	1
三滋京大和	5	9	9
兵岡広山愛徳	2	2	2
高福大佐長台	18	14	1
歌	1	1	3
訖田形馬玉京井知阜重賀都阪山庫山島口媛島知周分賀崎鷲	1	1	1
内	1	1	1
外	8	3	4
秋山群	4	1	3
東福愛岐	1	3	1
三滋京大和	5	9	9
兵岡広山愛徳	2	2	2
高福大佐長台	18	14	1
歌	1	1	3
訖田形馬玉京井知阜重賀都阪山庫山島口媛島知周分賀崎鷲	1	1	1
内	1	1	1
外	8	3	4
秋山群	4	1	3
東福愛岐	1	3	1
三滋京大和	5	9	9
兵岡広山愛徳	2	2	2
高福大佐長台	18	14	1
歌	1	1	3
訖田形馬玉京井知阜重賀都阪山庫山島口媛島知周分賀崎鷲	1	1	1
内	1	1	1
外	8	3	4
秋山群	4	1	3
東福愛岐	1	3	1
三滋京大和	5	9	9
兵岡広山愛徳	2	2	2
高福大佐長台	18	14	1
歌	1	1	3
訖田形馬玉京井知阜重賀都阪山庫山島口媛島知周分賀崎鷲	1	1	1
内	1	1	1
外	8	3	4
秋山群	4	1	3
東福愛岐	1	3	1
三滋京大和	5	9	9
兵岡広山愛徳	2	2	2
高福大佐長台	18	14	1
歌	1	1	3
訖田形馬玉京井知阜重賀都阪山庫山島口媛島知周分賀崎鷲	1	1	1
内	1	1	1
外	8	3	4
秋山群	4	1	3
東福愛岐	1	3	1
三滋京大和	5	9	9
兵岡広山愛徳	2	2	2
高福大佐長台	18	14	1
歌	1	1	3
訖田形馬玉京井知阜重賀都阪山庫山島口媛島知周分賀崎鷲	1	1	1
内	1	1	1
外	8	3	4
秋山群	4	1	3
東福愛岐	1	3	1
三滋京大和	5	9	9
兵岡広山愛徳	2	2	2
高福大佐長台	18	14	1
歌	1	1	3
訖田形馬玉京井知阜重賀都阪山庫山島口媛島知周分賀崎鷲	1	1	1
内	1	1	1
外	8	3	4
秋山群	4	1	3
東福愛岐	1	3	1
三滋京大和	5	9	9
兵岡広山愛徳	2	2	2
高福大佐長台	18	14	1
歌	1	1	3
訖田形馬玉京井知阜重賀都阪山庫山島口媛島知周分賀崎鷲	1	1	1
内	1	1	1
外	8	3	4
秋山群	4	1	3
東福愛岐	1	3	1
三滋京大和	5	9	9
兵岡広山愛徳	2	2	2
高福大佐長台	18	14	1
歌	1	1	3
訖田形馬玉京井知阜重賀都阪山庫山島口媛島知周分賀崎鷲	1	1	1
内	1	1	1
外	8	3	4
秋山群	4	1	3
東福愛岐	1	3	1
三滋京大和	5	9	9
兵岡広山愛徳	2	2	2
高福大佐長台	18	14	1
歌	1	1	3
訖田形馬玉京井知阜重賀都阪山庫山島口媛島知周分賀崎鷲	1	1	1
内	1	1	1
外	8	3	4
秋山群	4	1	3
東福愛岐	1	3	1
三滋京大和	5	9	9
兵岡広山愛徳	2	2	2
高福大佐長台	18	14	1
歌	1	1	3
訖田形馬玉京井知阜重賀都阪山庫山島口媛島知周分賀崎鷲	1	1	1
内	1	1	1
外	8	3	4
秋山群	4	1	3
東福愛岐	1	3	1
三滋京大和	5	9	9
兵岡広山愛徳	2	2	2
高福大佐長台	18	14	1
歌	1	1	3
訖田形馬玉京井知阜重賀都阪山庫山島口媛島知周分賀崎鷲	1	1	1
内	1	1	1
外	8	3	4
秋山群	4	1	3
東福愛岐	1	3	1
三滋京大和	5	9	9
兵岡広山愛徳	2	2	2
高福大佐長台	18	14	1
歌	1	1	3
訖田形馬玉京井知阜重賀都阪山庫山島口媛島知周分賀崎鷲	1	1	1
内	1	1	1
外	8	3	4
秋山群	4	1	3
東福愛岐	1	3	1
三滋京大和	5	9	9
兵岡広山愛徳	2	2	2
高福大佐長台	18	14	1
歌	1	1	3
訖田形馬玉京井知阜重賀都阪山庫山島口媛島知周分賀崎鷲	1	1	1
内	1	1	1
外	8	3	4
秋山群	4	1	3
東福愛岐	1	3	1
三滋京大和	5	9	9
兵岡広山愛徳	2	2	2
高福大佐長台	18	14	1
歌	1	1	3
訖田形馬玉京井知阜重賀都阪山庫山島口媛島知周分賀崎鷲	1	1	1
内	1	1	1
外	8	3	4
秋山群	4	1	3
東福愛岐	1	3	1
三滋京大和	5	9	9
兵岡広山愛徳	2	2	2
高福大佐長台	18	14	1
歌	1	1	3
訖田形馬玉京井知阜重賀都阪山庫山島口媛島知周分賀崎鷲	1	1	1
内	1	1	1
外	8	3	4
秋山群	4	1	3
東福愛岐	1	3	1
三滋京大和	5	9	9
兵岡広山愛徳	2	2	2
高福大佐長台	18	14	1
歌	1	1	3
訖田形馬玉京井知阜重賀都阪山庫山島口媛島知周分賀崎鷲	1	1	1
内	1	1	1
外	8	3	4
秋山群	4	1	3
東福愛岐	1	3	1
三滋京大和	5	9	9
兵岡広山愛徳	2	2	2
高福大佐長台	18	14	1
歌	1	1	3
訖田形馬玉京井知阜重賀都阪山庫山島口媛島知周分賀崎鷲	1	1	1
内	1	1	1
外	8	3	4
秋山群	4	1	3
東福愛岐	1	3	1
三滋京大和	5	9	9
兵岡広山愛徳	2	2	2
高福大佐長台	18	14	1
歌	1	1	3
訖田形馬玉京井知阜重賀都阪山庫山島口媛島知周分賀崎鷲	1	1	1
内	1	1	1
外	8	3	4
秋山群	4	1	3
東福愛岐	1	3	1
三滋京大和	5	9	9
兵岡広山愛徳	2	2	2
高福大佐長台	18	14	1
歌	1	1	3
訖田形馬玉京井知阜重賀都阪山庫山島口媛島知周分賀崎鷲	1	1	1
内	1	1	1
外	8	3	4
秋山群	4	1	3
東福愛岐	1	3	1
三滋京大和	5	9	9
兵岡広山愛徳	2	2	2
高福大佐長台	18	14	1
歌	1	1	3
訖田形馬玉京井知阜重賀都阪山庫山島口媛島知周分賀崎鷲	1	1	1
内	1	1	1
外	8	3	4
秋山群	4	1	3
東福愛岐	1	3	1
三滋京大和	5	9	9
兵岡広山愛徳	2	2	2
高福大佐長台	18	14	1
歌	1	1	3
訖田形馬玉京井知阜重賀都阪山庫山島口媛島知周分賀崎鷲	1	1	1
内	1	1	1
外	8	3	4
秋山群	4	1	3
東福愛岐	1	3	1
三滋京大和	5	9	9
兵岡広山愛徳	2	2	2
高福大佐長台	18	14	1
歌	1	1	3
訖田形馬玉京井知阜重賀都阪山庫山島口媛島知周分賀崎鷲	1	1	1
内	1	1	1
外	8	3	4
秋山群	4	1	3
東福愛岐	1	3	1
三滋京大和	5	9	9
兵岡広山愛徳	2	2	2
高福大佐長台	18	14	1
歌	1	1	3
訖田形馬玉京井知阜重賀都阪山庫山島口媛島知周分賀崎鷲	1	1	1
内	1	1	1
外	8	3	4
秋山群	4	1	3
東福愛岐	1	3	1
三滋京大和	5	9	9
兵岡広山愛徳	2	2	2
高福大佐長台	18	14	1
歌	1	1	3
訖田形馬玉京井知阜重賀都阪山庫山島口媛島知周分賀崎鷲	1	1	1
内	1	1	1
外	8	3	4
秋山群	4	1	3
東福愛岐	1	3	1
三滋京大和	5	9	9
兵岡広山愛徳	2	2	2
高福大佐長台	18	14	1
歌	1	1	3
訖田形馬玉京井知阜重賀都阪山庫山島口媛島知周分賀崎鷲	1	1	1
内	1	1	1
外	8	3	4
秋山群	4	1	3
東福愛岐	1	3	1
三滋京大和	5	9	9
兵岡広山愛徳	2	2	2
高福大佐長台	18	14	1
歌	1	1	3
訖田形馬玉京井知阜重賀都阪山庫山島口媛島知周分賀崎鷲	1	1	1
内	1	1	1
外	8	3	4
秋山群	4	1	3
東福愛岐	1	3	1
三滋京大和	5	9	9
兵岡広山愛徳	2	2	2
高福大佐長台	18	14	1
歌	1	1	3
訖田形馬玉京井知阜重賀都阪山庫山島口媛島知周分賀崎鷲</td			

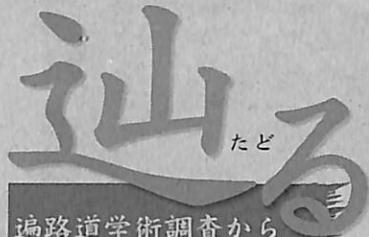
文化

CULTURE



高松から旧国道11号を東に向かい、新川を渡る新川橋の東の交差点

遍路道を行くと、願主をはじめとして、施主・世話人・石工と建立に携わった人々の名が記された道標をよく目にする。その一つひとつを見していくと、建立に当たったさまざまな人々の姿を思い浮かべることができる。



⑨

氏名不詳の家族たち



川のほとりで語りかかる氏名不詳の道標
〔高松市新田町〕

興味尽きぬ人模様

に興味深い道標がある。角柱平坦型のどつしりとしたもので、行き先や方向を示すのに手形、方位、左右が使われる比較的珍しいものである。

左側面には、「願主 新田村小山

□平」(□は判読不能)とあり、今

も近くにある新田町の旧村名のなごりをとどめている。ところが、正面

に目を向けてみると、願主は氏名が刻まれているのに、他の者は「高松

四十七才男 四十五才女 十三才男

四十才男 四十五才女 十三才男

の男の子なのである。このように名前を記さない氏名

詳の道標は、他にも数多くある。そ

十三才男 五才女」としかなく、年齢・性別はわかるものの名前はまったく記されていない。

おそらくこれは家族五人を記したものと考えられるが、どのようなわけがあつて年齢と性別だけしか刻まなかつたのだろうか。家族ならば、「十三才男」が二人あるのは、双子の男の子なのであろうか。

現状に五百二基の道標が確認されているが、どの道標もそれぞれ悲喜こもごものドラマを持っているのである。残念ながら今となつてはそのドラマの真相を追い求めていくことは、非常に難しくなつてきていた。しかししながら、そのドラマを想像するロマンは、次なる世代に伝え残していきたい。

田道雄
(四国遍路道学術調査研究会 池

道標の碑文に見る建立関係者

	基数	比率
願主・施主・世話人・石工	1	0.2
願主・施主・世話人	16	3.2
願主・施主・石工	1	0.2
願主・世話人・石工	3	0.6
願主・施主	78	15.6
願主・世話人	3	0.6
願主・石工	1	0.2
願主のみ	24	4.8
施主・世話人・石工	1	0.2
施主・世話人	23	4.6
施主・石工	1	0.2
施主のみ	142	28.3
世話人・石工	0	—
世話人のみ	14	2.8
石工のみ	2	0.4
施主などの名がないもの	191	38.1

CULTURE

文化



⑩

琴電八栗駅から北へ行くと洲崎寺がある。源平屋島の戦いで扇的を狙い撃つ「那須与一」が、必ず命中するようになると祈った「祈り岩」も寺のすぐ近くだ。

洲崎寺の境内南西の隅に、全長約一・五㍍の無縫塔がある。真念の墓

だ。そこには、次のように刻まれている。「元禄六歳大坂寺嶋住僧大法師真念靈位之立 六月廿四日施主□□□兵衛」(□は、判読不能)。どうして真念の墓は、もともとJR讃岐牟礼駅から牟礼町立牟礼小学校へ抜ける道の「明待ちの丘」と

四国遍路の父

で、一九八〇(昭和五十五)年二月に現在の場所へ移った。

さて真念は、土佐(高知県)の出

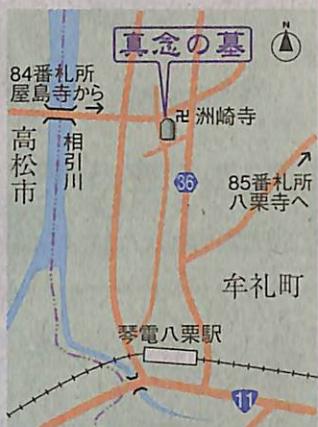
身で、真言宗に属し、寺も師ももたず、頭陀聖といつ遍路門付けを玉な生活とした僧であった。大坂寺嶋を本居として、一六三〇年(寛永年間)頃から空海に帰依し四国遍路を二十回以上行った人物である。

呼ばれる丘陵の峰に、「元結」と呼ばれる大きな岩があり、その付近にあった。「四国遍路名勝圖絵巻四」にも「原村の小高き岡の上にあり」とある。その後何回か移転したよう

彼の業績の第一は、「四国遍路道指南」をはじめとする遍路のガイドブックを出版し、精力的に遍路の普及・啓発活動を続けたことである。第一の業績は、遍路のために四国中

洲崎寺に眠る真念

に道標を建てたことである。また彼は、遍路宿と呼ばれる遍路のための宿泊施設をつくった。一六三八年(寛永十五)年にはすでにあつたと記録されている「真念庵」(高知県土佐清水市)は、その代表的なものである。さらに、遍路に対する「お接待」の風習や、札所ごとの「詠歌」も



洲崎寺の境内にある真念の墓=牟礼町牟礼

哉)
(四国遍路道學研究会
調査研究会 柏徹

ある。
百年後に四国遍路の
ピークを迎えるので

まさに真念の地道な活動は、四国遍路の大衆化に大きく貢献したと考えられ、四国遍路の父と称されるのにふさわしい人物であった。その後、真念の死から約

辻る

たどり

遍路道学術調査から

(11)

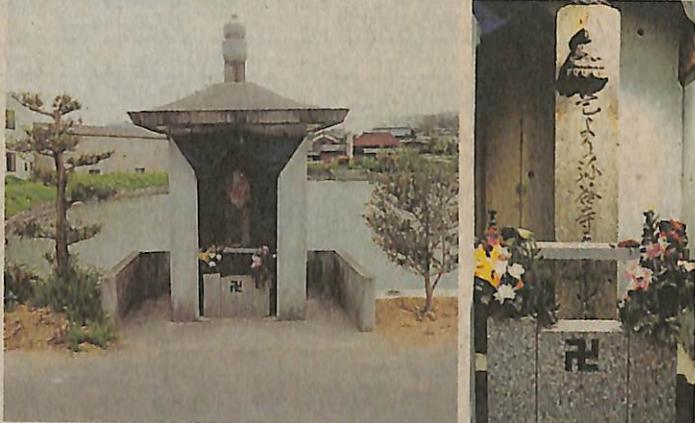
武田徳右衛門の道標

「徳右衛門」の銘が見える道標は、県内で十一基確認され、このうち七基については風化がかなり進行している。写真は高瀬町六松の池畔に立つ徳右衛門の道標である。

この道標が建立されたのは一七九六年(寛政八年)であるが、今でも土地の人たちによってお堂が建てられ、生花が絶えることなく強い信仰を集めている。また、風化・損傷もほとんど無く、建立当時の姿をとどめているものの一つでもある。

彼の建立した道標の形態は角柱蒲鉾型が多く、大きさは地上高約百五十六ミリ、正面幅約二十五センチが標準的なものとされているようであるが、中には二百センチを超えるものも認められる。

遍路大衆化に貢献



池畔に立つ徳右衛門の道標。お堂の中で大切に守られている=高瀬町六松

徳右衛門は、札所の近くに道標を建立して、お遍路さんの不安感をぬぐい去らうとしたのである。これも、自ら遍路を重ねた経験から得た知恵の一つなのであろうか。

真念から百年余時代が下って、寛政から文化年間にかけて遍路道の整備に尽力した徳右衛門は、札所の近くに道標を建立して、お遍路さんの不安感をぬぐい去らうとしたのである。これも、自ら遍路を重ねた経験から得た知恵の一つなのであろうか。

田耕一

(四国遍路道学術調査研究会 稲

遍路道の道標は、一六八〇年代から真念によって建立され始めた。江戸時代は、真念のあと、武田徳右衛門、照蓮、富三郎によって整備が一段と進み、明治になつて中務茂兵衛、栗田修三らの手で飛躍的に整備された。

彼らの道標にはそれぞれ独自なスタイルがあるとともに、さまざまな人間模様が見え隠れしている。以下、徳右衛門を皮切りにして、整備に尽くした人々の道標を巡つてみるとしよう。



る。

さて、徳右衛門の道

標で特徴的な点が二つ

ある。一点は、日光菩薩を指す「仏」の梵字

があること。もう一点

は、正面碑文の表現が

「是より○○込○里」

という案内表記になつ

ていて、札所までの距離を

記入することから札所

を出た近辺に建ててい

るもののが比較的多い。

真念から百年余時代

が下って、寛政から文

化年間にかけて遍路道

の整備に尽力した徳右

辻山る

遍路道學術調査から

路さんに宿の場所を決められるようにした新しい道標案内を採用していくのに對して、照運は、手形のみの道案内で一步後退した観がある。しかしお遍路さんに便宜を図るよりも、その道標に刻まれている「四國中千駄大師」、「真念再建」の

伊予（愛媛県）の武田徳右衛門の道標整備が一応終わりを告げるのが一八〇七（文化四）年である。それから続き一八〇九（文化六）年から道標を建てはじめたのが照蓮と彼のグループだ。

四國中千躰大師

12

か、彼と彼のケルバが建てた道標は、七十二基確認されている。そのうち六十二基が阿波（徳島県）だ。また、施主及び世話人の住所が徳島城下及びその周辺であること、材石が撫養石（徳島県産の砂岩）であることから阿波の人であることは想像がつく。



赤土池改修記念碑の脇にたつ道標
=観音寺市出作町

手形で導いた照蓮

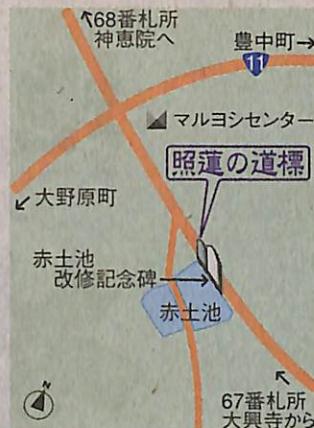
文字や大師像から、眞念の志を受け継ぎ四国中に千駄の大師像を建て

れていない。一人が会ったかどうかはわからぬが、徳右衛門に触発されて照運が道標を建てはじめたのは間違いないだろう。

つていた。嘉兵衛を施主とする道場が一八一四（文化十一）年に照蓮のグループによって建てられている。嘉兵衛が帰国した一年後のことである。

もしかしたら、おふさがこの道の資金を出したのかもしれない。
(四国遍路道学術調査研究会 柏
徹哉)

竹中直人が一代で海運王となつた事
田屋嘉兵衛を、鶴田真由がその妻おふさ
を演じた。ドラマの中でおふさは、嘉兵衛がロシアに進行されたとき、夫の無事を祈つて四国遍路を巡
っていた。嘉兵衛を施主とする道標
が一八一四(文化十一)年に照蓮の
グループによつて建てられている。
嘉兵衛が帰国した一年後のことである。



文化

CULTURE

辻る

たどり

遍路道学術調査から

13

中務茂兵衛の道標

茂兵衛の道標と言われるゆえんは、角柱型の二面を使って、「〇〇度自為供養周防國大島郡椋野村願主 中務茂兵衛義教」の碑文が、ほとんどの道標に共通して刻まれてゐるためだが、「中務」の他に「中司」姓を使用しているものも十四基を数える。なお、「義教」の法名を使用するのは百度自からである。

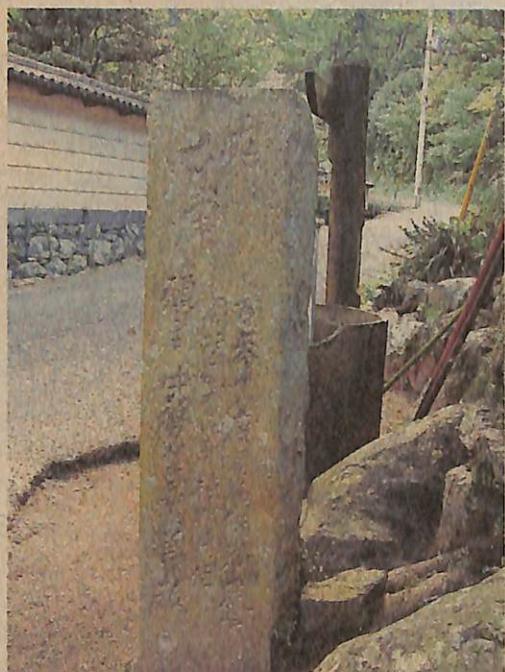
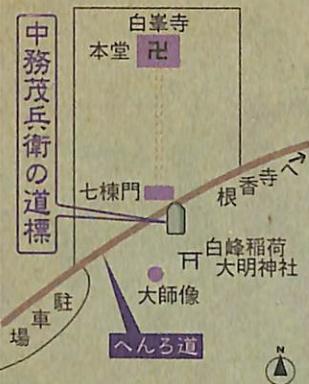
茂兵衛の道標は、下部が埋まつて高さが正確には測定できないもの

明治に入つて、道標建立に尽力したのが中務茂兵衛である。県下の遍路道には、「中務茂兵衛」あるいは「中司茂兵衛」の銘の見える道標が六十九基確認される。そのほとんどに彼の巡拝回数が記されており、八十八度目から二百七十九度目までの巡拝度数が認められる。

二百八十回に及ぶ四国遍路の巡拝を通して知り尽くした遍路道だけに、主に、願主として数多くの道標建立に関わった功績は、遍路道整備の上から見ると特筆される人物である。中でも、施主の出身地は一都二

府十五県に及び、真念同様全國的な広がりを見せる」とから、知名度の高い存在であつたことがうかがえる。

生き仏と慕われる



白峯寺七棟門前に立つ茂兵衛の道標
坂出市青梅町

の旅に出た。以後、ひたすら信心一筋に遍路を続け、ただの一度として故郷に帰らなかつたという。

遍路に明け、遍路に暮れる人生を八十七あり、平均でも百二十四・七社と、他の道標に比して大型で、遠くからでもよく目につくのが特徴。案内方法は、基本的には「手形」により、順・逆双方に対応できるものとなつていて、遍路道の特色をよく表している。

彼は一八四七(弘化四)年、庄屋の二男として生まれ何不自由なく育つたが、十九歳の時に突然四国遍路

(四国遍路道学術調査研究会 稲耕一)

文化 CULTURE

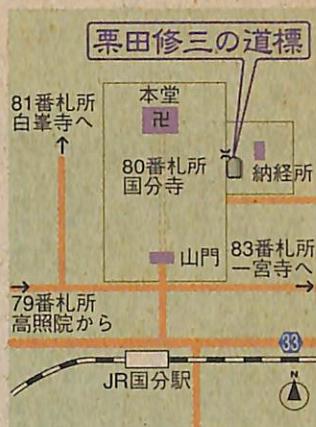
山

たと
遍路道学術調査から

私の勤務する県埋蔵文化財調査センターの玄関に入ると大きな石をくり抜いてつくった石棺がある。国分寺町柏原で発見された鷲ノ山産の角閃安山岩でつくられた石棺のレプリカだ。古墳時代、石棺の材石として使われた鷲ノ山の石が再び灯ろうや

(14)

栗田修三の道標



墓石などとして使われる始めるのは、江戸時代の中頃からである。現在でも、鷲ノ山の麓にある石船集落には、石材加工業者が軒を並べている。さて、この石を使って道標をついた人として栗田修三がいる。現在五基確認されている。道標の中央

には、「順拜〇〇度目供養」と刻まれており、八十九度目から九十六度目まで確認できる。その時期は、一九三〇(昭和五年)から一九三六(昭和十一年)までだ。

八十九度目から道標を建てていることから考えて、修三は四国八十八ヶ所にちなんで八十八度の巡礼を一つの区切りと考えていたのだろう。一九三二(大正十二年)、二百八十

昭和初期の大先達

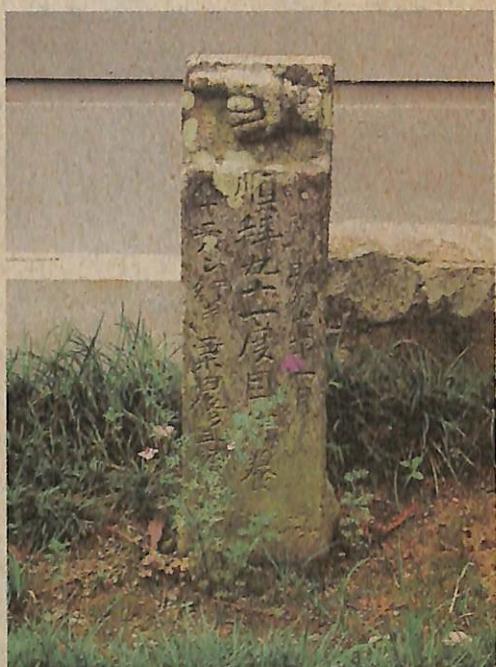
回目の四国巡礼の終わり近くに七十六歳で没するまで二百三十基余りの道標を建てた中務茂兵衛を手本にしていたに違いない。

また、修三は国分寺町とその周辺に道標を建てていること、その形や材石から考えて鷲ノ山の麓の同じ石屋に道標を注文していることから国分寺町かその周辺に居住していたのではないか。とすれば、居所を持たない茂兵衛のように年五回近く八十八ヶ所を回ることはなかつたであろう。八十八度も巡礼するには二十年以上かかつたはずだ。きっと茂兵衛

と巡礼の途中で出会つたであろう。地図や交通機関などが整備されなかつた時代に、遍路を行おうとすれば、遍路経験のある指導者について歩くことが必須だった。この指導者が現在でも「お先達さん」と呼ばれている人たちだ。修三を最後に、遍路道にまとまつて道標が建てられることはなくなつた。

修三は、道標を整備した最後の大先達といえる。

(四国遍路道学術調査研究会 柏徹哉)



栗田修三の91度目供養の道標
—国分寺町国分

山 たどり

雲辺寺に至る長い尾根づたいの道でささやかな道標を見つけた。道案内の手形にやわらかく法衣が添えてある。歩き遍路は口々に、「疲れていても道標に出会うとほっとする」という。道が間違っていなかつたという安堵感を得るとともに、そこに刻まれた文字や像から「自分は多く

道標は語る



法衣を添えた山上の道案内||大野原町
雲辺寺道

刻まれた祈り多様

たざまざまな人間模様をも推し量ることが出来る。今回は道標に刻まれた文字情報を中心に、先人のメッセージを読み取ってみよう。

の先人たちに見守られ、後押しされながら旅をしているのだ」と実感するからである。



の冥福である。さうには、遙かな先祖や広大な世界の中で仏に縁の無い人々の供養を願つたものもある。また、贖罪を願つ「減罪生善」が島内に二基存在する（牟礼町原の志度道と、さぬき市長尾の長尾道広瀬橋北詰め）。それぞれ、中務・茂兵衛の巡拝時に願主となつて建立したとされ

月見よといもの子どものねいりし
を おこしに来いか何かくるしき
の三十一文字が刻まれる。遍路を生
業とし、旅に暮らした茂兵衛がその
時々の心の有り様を歌に託したもの
である。
(西行作)
(西行作)

県内にはこの二基を含め、茂兵衛
関係の道標・石標が七十基確認でき
るが、そのうち九基に、和歌や俳句
を添えたものが見られる。その一つ、
普通寺市碑殿町の七仏薬師前の道標
には、

家族等の菩提・平安を願うもの
為父母井清空 為父母井六親
為六親菩提 為六親眷属
友人などの菩提を弔うもの
為小林巳之助
為源ハ郎君菩提
先祖の菩提を弔うもの
先祖代々 先祖代々菩提
先祖供養 先祖追善供養
広く衆生を供養しようとするもの
三界萬靈 法界平等
無縁法界
世の平安を祈るもの
天下泰平 天下太平
現世の罪の消滅と、来世の善報を助ける
ことを願ったもの
滅罪生善

文化 CULTURE

寺とあり一里半の道のりである。
丸龜は郷照寺道の通り道になる。
丸龜といえば金比羅参拝客の上陸場所であり、港にある「太助灯籠」と呼ばれる一八三八年(天保九)年に建てられた青銅灯籠が有名である。港を起点として金比羅参拝道が南に伸びている。丸龜街道沿いには、多くの常夜灯や丁石が今でも数多く残さ

辻る

たど
から
道学術調査路編

七十七番道隆寺から七十八番郷照寺までは、多度津、丸龜を通り宇多津に至る遍路道である。道隆寺表裏両門に郷照寺を案内する道標が見える。道標には札所名が宇多津道場

16

常夜灯の道標



羅灯籠である。一七九六年(寛政八年)の建立で、台座に「右七十七番鴨道隆寺二八丁・左七八番宇多津道場寺三丁」とあり、金比羅参拝のための

丸龜には、常夜灯で道標を兼ねたものが二基ある。一つは、福島湛甫の突堤にあつたものが移転され、現在は南条町の寿覚院近くにある金比

度の時は宇足津道場寺より札はじめものが二基ある。一つは、福島湛甫の突堤にあつたものが移転され、現在は南条町の寿覚院近くにある金比

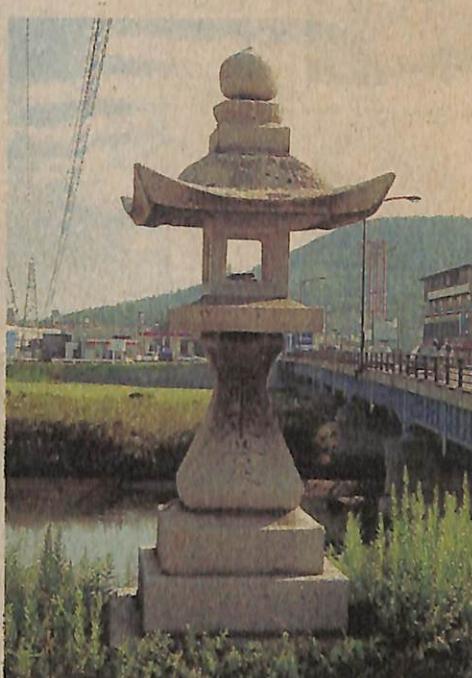
よし」(『四国遍路道するべ』)と文化四年)とあり、丸龜の港に上陸する者の中には、金比羅参拝の客とともに、八十八カ所巡りの客もあつたようだ。

もう一つは、土器川にかかる蓬萊

交差する信仰の道

家親夫

(四国遍路道学術調査研究会 福



土器川蓬萊橋西にある川渡の道標のある常夜灯=丸龜市土居町

橋西詰めにある常夜灯である。この場所に二つあるうち、南側の常夜灯は一八二一年(文政四年)の建立で、台座には「川渡左遍路道」とある。當時、旅をするのに川は重大な関心事。渡れるかどうかは旅の進み具合に大きく影響することだった。

に至る。

土器川を渡れば高松藩に入る。当

時は、海辺の道を通り、青ノ山北麓

を目指して進めば郷照寺(道場寺)

に至った。

土器川を渡れば高松藩に入る。当

時は、海辺の道を通り、青ノ山北麓

を目指して進めば郷照寺(道場寺)

に至った。

土器川を渡れば高松藩に入る。当

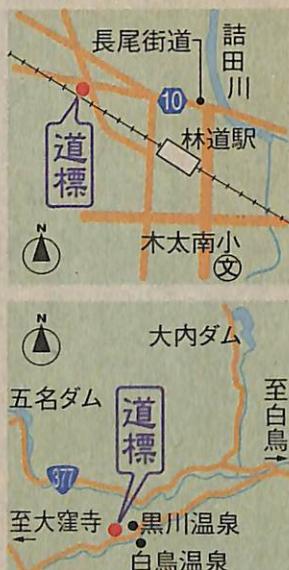
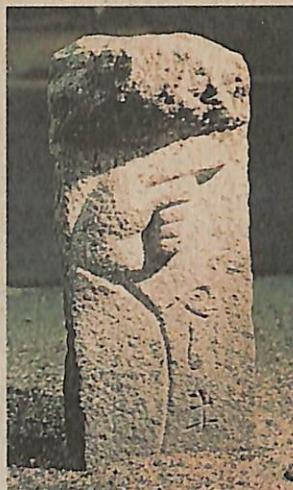
時は、海辺の道を通り、青ノ山北麓

を目指して進めば郷照寺(道場寺)

CULTURE

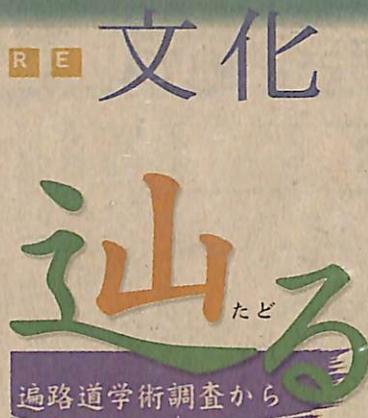
文化

人さし指が屋島寺
へと導く道標=高
松市木太町



手のひら全体が大窪寺へと導く道標=東かがわ市

修行の道と言われる遍路道は、歩き遍路にとつては厳しい道に違いない。そうした遍路行を無言でそっと支えるのが遍路道沿いに次々と現れる道標である。風雪に耐えてきた道標のもつ豊かな表情に、遍路の心や体が癒やされる。中でも、目指す札所の方向がすぐにそれと分かる手形



17

石工の創意

には、より癒やしの要素が強いと思われる。県下の道標のおよそ56%に、手形が案内表記として使われ、その表現は実に巧みで、手の表情が豊かであり、かつ多様だ。

このうち最も多く見られるのが、人さし指で方向を指す型で、県内に二百三十九基認められる。写真①の道標は、高松市木太町、琴電長尾線仮屋の踏切を渡った屋島道に建つもので、ふくよかな手の姿が見事に浮き

夜中に盗難に遭いかかり、近くの人々が取り戻してしっかりと建て直した所の方向を示す型で、県内には三十基認められる。写真②の道標は、東かがわ市黒川温泉近くの白鳥道にある。この道は、大窪寺で結願した遍路が、白鳥宮あるいは引田港へと向かう道で、道標には白鳥宮へ百丁、大窪寺へ九十丁とある。おにぎ

味わい深い手の形

彫りにされ、線描の法衣のラインも手の表情にマッチしてしまやかである。「やしま」の字もひらがなで全体のバランスを保つており、石工のセンスが伝わってくる。手形の上へのさしもユニークで、この道標には、

り型の素朴な自然石に、手のひら全體で大窪寺方向へと遍路を案内している。逆打ちである。この道標は、かつては斜面に埋められていたそうだが、今は地元の人によってセメントで固めて建てられている。

(四国遍路道学術調査研究会 姪
田朋樹)



このように手形の型だけではなく、それらが浮き彫りであったり、平彫りであったり、また、彫りの浅いもの深いものとさまざまに表情を変えるのである。「道標の数だけ異なる」という表現を見せる。これが遍路道の道標である。このことは、三百余年の道標建立の歴史の中で、多くの石工が創意工夫を凝らしながら、精魂込めて製作してきたことの証でもある。

CULTURE

文化

白峯寺から根香寺へ向かう遍路道は昔の面影を色濃く残す古道である。この遍路道を根香寺へ十ほど歩くと古田に出る。(ここは江戸時代の国分寺道と根香寺道が交差する交通の要衝である。古田には、古い道標から新しい道標まで狭い範囲にた

る。この中で一八七〇(明治三)年に建立された道標の手形の向きが面白い。右側には左を指差す手形があり、左側には右を指差す手形があり、白峯寺への道を示している。



辻る

遍路道学術調査から

⑯

道標の「博物館」

左右の手形の人差し指が石の中央でくついているのである。右側には右方向の札所を案内するのが普通であるのにこれは反対になっている。このように手形の向きが左右反対になっている道標は大変珍しい。

また、この道標の右側面は国分寺道を案内しているが、その手形が凝ついている。手に扇子を持つていて指先と扇子で国分寺道を案内している。全体としてこの道標は奇麗で形

を案内する道標がある。一九三六(昭和十二)年、栗田修三が建立した四

が面白い。

国遍路「九十六度目」のものである。さらに面白いことに自衛隊の金網製

塀には遍路道の案内札が吊つてあ

つたり、塀の横に二〇〇二(平成十四)年に建立された真新しい道標があつたりする。「核兵器廃絶」「世

界の平和」の文字が書いてあり時代の変遷を感じる。自衛隊の「立ち入

り禁止」の看板や塀との不釣り合

たり、塀の付け根に「陸軍用地」と書かれた境界石がある。立ち入り禁止区

域の塀の中に江戸時代の地蔵丁石が

二つ並んで建っているが、近寄って観察することは出来ない。また、こ

のすぐ北側の山中に朽ち果てた遍路宿があり往時の面影を残している。

五色台の粹な案内

も良く三個の手形には振り袖が付いており、石工の意気込みが感じられる作品だ。

この道標のすぐ横には右側面には右方向を、左側面には左方向の札所

江戸時代から平成の現代まで、歩き遍路のためにいろいろな形の道標や丁石が建つ五色台。まさに道標の博物館である。

昭宏

(四国遍路道学術調査研究会 森



手形の向きが反対(左側面)になって
いる珍しい古田の道標=坂出市青海町

最近人気のあるテレビ番組に「トリビアの泉」がある。人生に全く必要のないムダな知識、だけど明日人に教えたくなるような雑学・知識（＝トリビア）を紹介する番組だ。おそらくトリビアに属する知識だが、香川県の遍路道にある最大の道標（＝トリビア）を紹介する番組だ。



19

県内最大の道標

いる。二番目は、丸亀市の塩屋別院南に明治時代につくられたと思われる全高二百八十六ヤの石柱だ。一位は地蔵の台座、二位は別院の標札との兼用だが、純粹な道案内の道標としては、坂出市高屋町にある道標が最大。この道標は、白峯寺参道にある下乗石と同型で、一七九四年（寛政六）年に八代高松藩主松平頼儀がつくったとされている。全高二

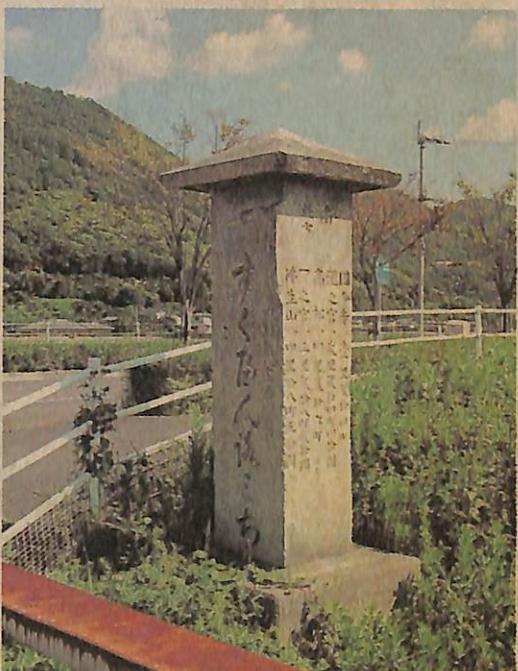
一七九二（寛政四）年であり、初めてお国入りした一七九六（寛政八）年の十一月に領内巡視を行っているので、頼儀がこの道標を目にしたのは建てられてから二年後だ。さて、江戸時代の道標は、全高二尺から三尺（約六十ヤから九十九ヤ）のものが多い。大きくて五尺（約百五十ヤ）である。高松藩ではこの時期、街道に石仏や石塔を建てること

を禁止し、墓石の大きさも四尺（約百二十ヤ）以下にするようにたびたびお達しを出している。どうしても石塔を建てる必要がある場合には、その設置理由と設置位置の図を大庄屋に提出して、許可を求めていた。しかし、繰り返しお達しが出ていることや当時建てられた道標が現存していることから考えてこれらの制限は、厳格には守られていなかつたようである。

（四国遍路道学术調査研究会 柏徹哉）

百二十五センの良質の花崗岩（寛治四）を使つた道標だ。前年に白峯寺金堂を頼儀が寄進していることから、この寄進に伴つ道標と考えてよい。といつても頼儀が藩主となつたのは、

標はどれだろうか。
筆頭に挙げられるのは、一七九七年（寛政九）年につくられ、国分寺、白峯寺、根香寺方面の三つの道が交差する「十九丁」と呼ばれている場所にある地蔵である。全高三百五十センあり、台座に道案内が刻まれて



白峯寺を指さす道標。純粹な道案内の道標としては県内最大=坂出市高屋町

高松市勅使町、一宮道沿いの遍路道に明治十二年建立の、立派な大師像を浮き彫りにした道標がある。高さ百三十九センチ、正面幅三十一・五センチの角柱角錐型の道標で、正面には手形で「いち能みや道」、左面に「ね古路みち」と二つの札所が案内され、

20

辻たどり

遍路道学術調査から

大師と道標

大師様に手を合わせたことだろう。

道標には大師像以外に、大師の法号「南無大師遍照金剛」を刻むものも見られる。県内では、大師像四十八基、法号十三基、合わせて六十一基で、調査した石造物全体の12・2%に当たる。

四国遍路は弘法大師空海追慕の念から生まれた。石造物以外にも、「同

うになった。自然とお遍路さんの話を聞く機会が増えた。
七十歳を過ぎて、四国の歩き遍路とシルクロードの踏査を並行して実行に移したある男性は、自分の中で二つの旅がうまく共存している心情を語ってくれた。彼にとつて、仏法を語つてくれた。彼にとつて、仏法を求めて異国を旅し、生まれ故郷の四国を修行地とした空海は遙かなる憧れの存在であるという。また、

香があがっていたら、あげないの。だって、来る人みんながあげたら、お大師様煙たくて仕方がないでしょ」と言つた。
永遠の先達、修行僧空海、身近なお大師様…。お大師様との距離も心の中の位置づけも人それぞれ。今は残る多様な石造物群は何世紀にも及ぶ、さまざま思いの集積である。

本和博

(四国遍路道学術調査研究会
連)

行一人」と書かれた杖、笠、装束などお大師様で満ちあふれている。
私は、今回の連載の取材で休日に遍路道を訪ね、石造物を探し歩くよ

う

追慕の思い脈々と

右面に大師像が刻まれている。裏面には建立日時と施主「西河野氏」と刻まれ、すぐ西側の住人によって建てられたことが分かる。

文明開化の中で建立されて以来百三十年、どれほどの人々がこの道標を頼りに旅をし、立ち止まつて、お



道標に刻まれた大師像—高松市勅使町

CULTURE

文化

辻る

たどり

遍路道学術調査から

21

野ざらしを心に風のしむ身かな
貞享元年(一六八四)八月、松尾
芭蕉の『野ざらし紀行』の出立時
である。

この時代は、本欄に何度も登場し
た真念法師が、四国でさかんに活躍
した時代である。真念の『四国へん
ろ道指南』には、「あちこちの有志
の援助で標石を建てたが、年月を経
て見えなくなつたとき、へんろや村
の方々で再建してください」とある。

道標は道路の位置・方向の標識だ
けでなく、大師の足跡を辿る「四国
へんろ」の信仰に基づいて、建立の
場所や、刻まれた尊像・銘文に、願
主・施主の「祈り」があり、時代ご
とに、思いの軸足をすりしながら今



日に至つてはいることは重要なことな
のである。また、水呑をして出発し、
野ざらしを覚悟で四国を回つたお遍
路さんの歴史では、今日の遍路や道
路標識を見る感覚とは大きな違いの
あることに気づかなければならな
い。

急速な経済発展と交通の発達で、
道がつけかえられ、道標をめぐる価
値観の相違から「用なし」として、
あるいは「邪魔もの」として、「や
ぶれ草履」を脱ぎ捨てるように、埋
められたり、捨てられたり、単なる
石として人の目から隠されたりした
のであった。

写真の二つの道標は、四十余年前
まで国分寺町下福家あたりの四叉路
で、安原へ向かう古道を挟んで東西
に立っていたらしい。それが、戦後
刻んだ道標は、国分寺町文化財保護
関係者によって、同町北部公民館東
側に移転保管され、閔ノ池近くにあ
った中司茂兵衛の百度目供養碑など、
六基の道標とともに一ヵ所に集
められたのである。

そして、下福家に残る「国分寺



農道拡張工事に伴い、国分寺町北部公民館東側に
移された道標(A)

国分寺町下福家に建つ道標(B)。手形の下の字は
消されている

道標受難

埋められ、捨てられ



の農道拡張工事で、東側に「右やす
はら 左ノみや道」と刻み、関の
池から唐渡峠に向かう道に面して、
肉厚の指差しと大師尊像・施主名を
刻んだ道標は、国分寺町文化財保護
関係者によって、同町北部公民館東
側に移転保管され、閔ノ池近くにあ
った中司茂兵衛の百度目供養碑など、
六基の道標とともに一ヵ所に集
められたのである。

（四国遍路道学術調査研究会 藤井洋一）

辻る

たどり
遍路道学術調査から

22

降り注ぐ酸性雨

道標の風化に拍車

が可能な状態である。

川田裕史氏（元高松市四番丁小校長）が一九七九年に行つた調査では、

このうち四文字を明瞭に判読できたとある。現在、建立から既に二百年が経過しているが、風化が激しく進行したのは二回の調査の間、つまり最近である。車の通りぬ山中で、周辺環境が建立以来それほど変化していないことを考へると、急激な風化の進行は国内外の大気汚染からくる酸性雨などと深く関係しているのではないかとの推論が成り立つ。

八〇年代からヨーロッパでは歴史的遺産の酸性雨被害が大きな社会問題となつてゐる。ドイツのケルン大聖堂では顔の溶け出した天使の大理石像、腐食で鮮やかさを失つたステンドグラスなどの被害が生じた。巨費を投じても、修復は困難を極めている。



十九丁の大地蔵像
(上)と台座に刻まれた字（拓影）
II 坂出市青海町

を試みた。讃岐の石造物はそのほとんどが花崗岩、安山岩、凝灰岩、そして砂岩で占められている。これに大理石を加えて、それぞれを小さく砕き、強酸の中に一週間ほど浸けてみた。結果はヨーロッパで神殿や石像に使われる大理石（炭酸カルシウムが主成分）が100%溶け切ったのに對し、讃岐の石材では、5%以内の減少だったものの、腐食と溶解がみられた。

高度成長期、そしてバブル崩壊後の九〇年代、路傍の文化遺産は開發の波にのまれ、大気汚染に苦しんでいたことになる。酸性の雨は石造物ばかりか、道々を歩いて旅するお遍路さんにも、そして私たちの頭上にも降り注いでいる。

そこで、石造物に対して酸性雨の影響がどの程度あるのか簡単な実験

本和博

（四国遍路道学術調査研究会 蓮

日本がバブル経済に沸き返っていたころ、遍路道を歩く人はほとんどなく、道は荒れ果てていた。そのバブルがはじけ、経済不況が押し寄せた時、人々は一人、また一人と遍路道を歩き始めた。心の癒やしを求め、自分探しをする歩き遍路の再開である。

山 たど る

遍路道学術調査から

23

癒やしの道

になつてから急に増えている。

庶民の手によって江戸時代から始まつた丁石、道標の建立も戦後ばかりでなく、やんばつた。それがバブルの絶頂期に山間部の遍路道の一部は「四国のみち」として整備された。遍路道が役所の手で整備されたのは歴史上初めてのことであろう。

急増する歩き遍路

雲辺寺や五色台は遍路道が四国のみとして指定されているので多くの遍路やハイカーが歩いている。しかし高松市屋島東町の遍路道は四国のみちに指定されなかつたため荒れ果てて通る遍路もほとんどいなくなってしまった。最近になつて屋島東町遍路道保存会の尽力により遍路道は整備され、徐々に歩き遍路も見かけ

るようになつてきた。

また、さぬき市の前山ダムから大塙寺へ至る遍路道も四国のみちに指定されなかつたため歩く人も多くひつそりとしている。しかし新たに前山ダムから女体山越えの山道が四国のみちに指定されたため歩き遍路道は四国のみちを歩いている。遍路道を表す札もたくさん吊るされてゐる。新しい遍路道の出現である。

徳島県鳴門市の一番札所靈山寺の納経所に「歩き遍路」だけが記帳出来るノートがある。住職の芳村超全さんにお聞きしたところ、平成元年以降のノートが保存されていた。グラフはその人数である。昭和五十年代、六十年代は歩き遍路の数は毎年百人程度で横ばいだったが、平成



時代は昭和から平成へと移り変わつた。現在は車中心の社会だが、最近は車中心の社会だが、最も近い遍路道は見直され、歩き遍路が増え始めた。歩き遍路が増えると時立が始まつた。平成七年に八栗道に

昭左

を同じくして平成になつて道標の建立が始まる。最近は遍路道を歩いていると真新しい道標に出会う喜びが増えた。

(四国遍路道学術調査研究会 森



女体山越えの四国のみちに建てられた平成の道標
(四国遍路道学術調査研究会 森

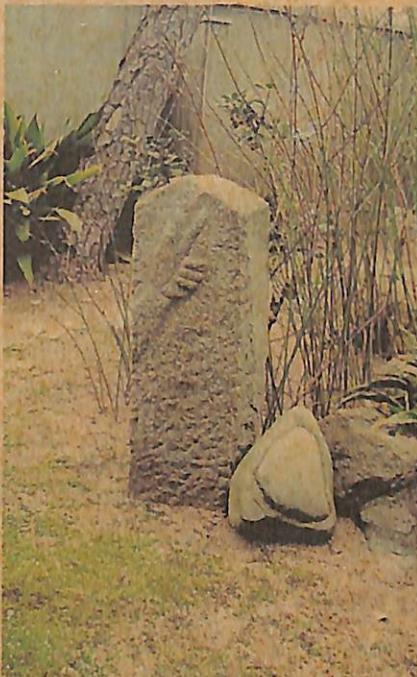
辻

たど
遍路道学術調査から

24

の報告と比べると、道標が二十四基、丁石が十五基不明となっている。

連載中に読者から、場所が動かされたり、埋められたりした事例を知



民家の庭に保存されている
道標=高松市木太町二区

道標・丁石 守り伝えたい文化遺産

民家の軒下に移され横たわる道標
II 高松市松縄町



を感じさせ、屋島寺の方向を指さし併んでいた。松縄町で調べた道標と同じ材質（花崗岩）、形態（角柱型）、案内表示（手形）のものだつた。

さらにH氏から、木太町九区の龜池北側土手沿いの近くにお地蔵さんがあり、その横に右手人さし指で方向を示しただけの手形道標があることを紹介された。由良石で高さ六十三センチ、正面幅二十一センチ、側面幅十六センチ。もとは道の交差する場所に正しく北向きに立っていたのである

が、道幅を広げるためお地蔵さんが横へ移設した際に手形が西向きに

読者から貴重な情報 失われた史料の確認続く

つていて、手形の向きが違っている道標があるなどの貴重な情報をいただいたので紹介したい。

四国遍路道学術調査研究会の調査の成果をもとに、昨年九月から始めた「辻」の連載は、今回が最終回となつた。

三百余年にわたって「歩き遍路」

を見守ってきた遍路道のシンボル「道標・丁石」は、道路の拡幅や建物の建築などの都合で、その所在が不明となつたものが少なくない。調査を終えた二〇〇二年一月現在では、道標五百一基、丁石二百九十七基を確認しているが、二十五年前の

川田裕史氏（元高松市四番丁小校長）

が埋設部分だつたらしい。実に40%

の表情は見飽きることのない温もり

が地中にしつかりと根を下ろし、役割を果たし続けていたのだ。静かに横たわる道標は、一日も早く遍路道に立ちたいと私たちに語りかけていくように思えた。

市伏石町の余伏石農協敷地内の東西隅に、道標

基が建立されていたが、

社会保険栗林病院託児所に建て替わる際に、二百ほど東にある松縄町の民家の軒下に移され、横に倒して保管してあるとのこと。さつそく訪ねてみた。道標は左手の手形だけが刻まれたシンプルな角柱型で、正面幅二十四センチ、側面幅二十四センチ、全長百十一センチあり、そのうち約四十五センチが埋設部分だつたらしい。実際に40%

の手人さし指を斜め上に向かう手形だけが刻まれ、願主、施主の名もなく、行き先や、いつ建立されたのかも分からぬ素朴なものだ。しかし、手

の表情は見飽きることのない温もり

が、これらの課題に一石を投ずるものとなれば幸いである。

（四国遍路道学術調査研究会 会長・山口対一、川田信子、柏敬哉）

おわり



移設の際に手形の向きが変わった
道標=高松市木太町九区

変わってしまったことである。

これらは、道標が本来持つべき機能をなくしているとはいっても、遺失を免れた幸運なケースといえよう。

一方、埋設や撤去などで人目に触れなくなつたものも少なくない。事実、H氏によると、道標一基が道路拡幅工事の際に地中に埋められるのを確

認しているという。遍路道に立ち続けた道標が失われてゆくのは、なんとも寂しく、しのびない思いがする。

二十四回にわたる「辻」の連載で、香川県内の道標や丁石の現状を紹介し、そのいくつかについて、形態や案内表記の特色を見てきた。また建立にかかわった人たちの人間模様に思いを巡らすことで、物言わぬ道標や丁石の、私たちへの語りかけを少しは汲み取ることができたと思う。読者から「今まで気づかなかつたけれど、道標に願主や施主など関わった人たちのいろいろな思いがあつたのが分かつてうれしい」「毎日、何げなく目にしていた道標に親しみが湧いてきた」などの感想をいただいたのが多かった。読者の感想をいただき、励みになつた。

先人たちがこの地に残した遍路道のシンボルは、大きな環境変化の中で消失や風化の波にさらされていく。かけがえのない文化遺産を次の世代にどのように引き継ぐのか、現代に生きる我々の課題といえよう。四国遍路道学術調査研究会の報告が、これらの課題に一石を投ずるものとなれば幸いである。